

193.4
0.77

193.4-077ウ
1200500728690

傷める葦を折ることなく
小塩 力著
(現代説教選 第七)



始



現 代 説 教 選

7

9
34

小 益 力

傷める葦を折ることなく

イザヤ書第四章一―四節

新 教 出 版 社

193.4
0.77



傷める葦を折ることなく

人ひとり人が坐してゐる。世の常の風俗につつまれつつ、天からの細微な聲を聞かうとするかのやうに、列王紀上二・九一、傾聴の姿勢をくづさない（イザヤ書五〇・四）。その相貌には屢々豫期せられるやの、宗教的秀麗もなく（イザヤ書五三・二）、その生活には期待せられる如き威嚴をも缺いてゐる（イザヤ書六〇・六）。ただその身肉から滲み滴る言をきくときに、私共の心はひらかれて、この人を他道者呼ぶのに躊躇しないのである。

世界に對して統一のある答を提供するかの如くであるが、世界からは雜然たる囁りとしてしかうけとられない（使徒行傳一七・一八、二・四一）。しかし若し人が、ひとたび歴史の呻きと身を一つにし（マ書八・一九）、或は卒然として郷愁の深みを實感した場合には（使徒行傳二・五一―二）、この小さい群の雜然たる異言と冗語の中に「神の大なる御業のかたられ」るのを聴取し、創造と救贖との眞

わが扶くるわが僕、わが心よるこぶわが撰人をみよ。
我わが靈をかれに與へたり。かれ異邦人に道をしめすべし。彼は叫ぶことなく聲をあぐることなく、その聲を街頭にきこえしめず。また傷める蘆を折ることなく、ほのくらしき燈火をけすことなく、まことをもて道をしめさん。かれは衰へず喪膽せずして道を地はたてをはらん。もろもろの鳥はその法言をまちのぞむべし。

（イザヤ書四二・一二―四）

理すなはち神の神たる眞理に（イザヤ書四二・五―八）耳を傾けざるを得ない。これが、神に召され世に派遣せられた、所謂傳道の教會にほかならない。

紀元前六世紀、イスラエルは國家の喪失に愕然とした。同胞のうち優秀な分子がバビロンに捕囚せられるに及んで、民族的慟哭は限りなく深まつた。與へられたこの苦難の問題に直面して、いささかも目退がず、身をもつてこの窮途を突破した指導者のうち、その最たるものを第二イザヤとする。この預言者の書の中に所謂「主の僕の歌」が珠玉のやうに鑲められてゐるのである。上掲本文はその第一歌として、まづこの世界傳道の創設者といふべき「僕」を紹介しつつ、傳道そのものの意味と方法と目標とを明かならしめる。この歌は、ひとたびイエスの胸奥に收斂して後、すべての時代あらゆる民族に眞の傳道の特質を語つてまたやむことを知らない。

二

冒頭の一節に、主の僕の選抜、裝備、使命といふ重い事實が語られてゐる。

わが扶くるわが僕、わが心よろこぶわが撰人をみよ。我わが靈をかれに與へたり。かれ異邦人に道をしめすべし。

ひとはみな求道者であり得るし、またつねに道に志す者でありたい。しかし傳道者宣教師であると云ふことは斷じ難い。それはどこにも見える資格や保證がないからである。自分免許の宗教熱心家、

政治的事業家、無厭に他者の聖所に踏み込まうとする靈魂干渉家、神學概念を弄ぶ者はある。然し福音宣教師の眞偽の鑑別は、他よりするも己よりするも不可能なことである。歴史もまた速急には眞相をあかし得ない。初代教會でも巡廻傳道者の眞偽をみわけける法に苦心したと見え、「十二使徒の教訓」にも一項目を割いてゐる。一宿一飯以上を要求する卑しさとあつかましさ^イを以て、偽たるを判斷すべしといふのである。これは微笑ましい實際智である。今日もこれに類する常識的直觀は有用であらう。然し傳道者の眞偽の證據は遙に深い處で問題とされねばならない。それは自己確信でもなく、品性や能力の優秀にもよらず、召命感でさへもないのである。代々の教會で異端とよばれる程の人材は、恐らく道徳堅固な傑物であり論理明晰な頭腦であり情緒こまやかな魂であつたと思はれる。しかも各々、聖書の言葉の解釋に根ざして、己が高調するところを義しいと確信してゐた。我々がもし大いなる異端論争の址に佇んで、人物の好悪や論議の合理性によつて動くとするならば、アウグスティヌスやルターとその論敵とのいづれに親しみを感ずるであらうか。アリウスやベラギウスや、エラスムスやセルヴェートや、これらの人々が、ユマニテの名のもとに世の多くのすぐれた人々から敬愛せられるのも理由のないことではない。それゆゑ教會が職制を重しするとき、より深い無保證を自覺しなければいけない。聖禮典の執行に於いて見ゆる言を提示しう資格を誰がもつのであるか。説教に於いて、人間の言を語りつつ、そこできこゆる禮典を誰が呈示しうるといふのであるか。召命は人の感にはよ

らない。神のみ、その自由によつて、召し或は召し給はない。人の側の確信は空しく、保證はただ神にあるといふのほかはない。神が、そのめざす魂に、或は物に、内面から刻む。この肉體に刻まれた「律法の言」が、時あつて聖靈に照らされて疼くとき、神の斷言をわが内奥から響かしめるといひうるのである。何ものによつても理由づけられることなく、ただ神自身の本質の測り知るべからざる深みから、その自由と愛とから、設定したまふ召命のみ人をして傳道者たらしめる。それ故神の決定意志と紹介の辭とが眞正の證據なのである。我が扶くる我が僕、我が心悅ぶ我が撰人よと。これはイエスに於いて完璧な對象を見出した言である。「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」(マタイ傳三・一七、一七・五)。ここから發射してきて、個と群とに衍するとき、畏れと面映さきに滿ちた自己評價の聲が、選拔選任のしるしとなるのである。豫定選拔はかく神に歸せられねばならない。

然し、選ばれた僕が、この時代に出で立つためには、あらためての準備を要する。人でいへば武裝、船でいへば艦裝である。我はわが靈を彼に置きけり。靈とはやや概念的にいへば「神の本質と神の能力」にほかならぬ。この靈にあづかる。それ故預言者は靈の人(ホセア書九・七)といはれる。基督者と聖靈によつて不斷に教へられる者(ヨハネ傳一四・二六)、聖靈を劍の如く佩く者(エペソ書六・一七)だといはれる。聖靈の消極的な能作を信することは比較的容易い。しかしそれではソクラテスの徒たるにとどまる。もつと能動的な聖靈の啓導を信じなければいけない。來ませ、創造主なるみたま

よ。來つて我らを全く裝備し給へ。

第三に使命が明かに規定されてゐる。即ち萬國の民に道を示すことであると。祖國の運命が痛切にとりあげらるべきときに、この傳道者、顔が世界に向いてゐるのは訝しい。志向を同胞に定めつつ、成果を萬國に見ようとするのは純一でないやうに思はれる。同胞の困苦を直視するに怯へえず、顧みて他をいふ類であらうか。眞理一般の世界に具體を融かして、生命と救との濃度を薄めるのであるか。否である。眞に民族の律法と運命とが考へられるところは、それらが神の言に還元されることであるからである。唯一神論と四海同胞主義とに展開する場所で、神の言は最も正しい具體性と眞理性とを發揮するからである。道と譯された言葉は、律法、正義、法言など種々の譯語があるが、法では誤解し易いし狭く、宗教では自由に過ぎる。それでフォルトツ等とともに、「眞理」をもつて原義の含むところを最もよくあらはすとする。萬邦に、ひたすら眞理を。我々の使命もまたこのほかにはない。

三

眞理をといふ。しかし眞理には眞理独自の表現がある。逆には眞理内實の必然の展開方法をはなれては、眞理そのものもないのである。道は方法である。方法は事柄に即して、寧ろ事柄の内奥からの獨特な自己規定自己表白によつて、一歩づつその眞をあらはす。従つて、福音は福音宣教を規定し、逆に傳道法が傳道内容を制約するのである。かたちがことばを定め、眞實が眞理を示すともいへるの

である。二節三節は二段に分けて主の候の傳道法を具象的に敘述してゐるが、本質的には「眞實をもて眞理を示す」といふ末尾の一句に集約することが出来る。

彼は叫ぶことなく、聲をあぐることなく、その聲を街頭にきこえしめず。また傷める處を折ることなく、ほのくらしき燈をけすことなく、眞理をもて道を示さん。

第一段は、言葉通りにきけば、大衆運動の拒否であり、所謂宗教的宣傳法の否定である。第二段はこの徹底化である。然し兩段の移行は相互交錯的に行はれるので、各主張の墮ち掛け易いところを補ひあふ。

まづ第二段をして第一段を預め補はしめることにしよう。「彼はわめかず、聲高く叫ばず、街頭にその聲をきこえしめない」。この注意は、今日我々の怠惰の自己辯護に用ひられる惧れがある。我々は今迄よりもつと組織を重んじなければいけない、大衆の心を暖めねばならない、そして機會の喪失に對して敏感でなければならぬ。過去の基督教會が、この點に於いて、いかばかり失敗を繰返してきたことであらう。教會の微力が、己の底をさらけてまで同胞と共にすることを不可能にしたのである。國家の危殆を認識し、うつ手をうつべき時に、教會の怯懦はこれを敢へてし得なかつた。主張をさけ、論戦を避け、しらすしらすのうちに自ら「ひげをぬかれ背を耕させる」こと（イザヤ書五〇・六）を覺悟しなかつた。そこで今日再びとつたものは、漸く同胞と苦難の水準をともししてゐる情況

のみである。私は信する、今にして教會が見榮をすてなければ、味なき鹽として世界に存在の意味をもたぬであらうと。神に信頼があればこそ、律法あるものにはその如くなり、律法なきものにもまたその如くに成らねばならない（コリント前書九・二〇―二一）。受肉の祕義から比喻を借りるならば、基督者こそは所謂基督教徒たるの貌に固執する要はない、日常人の貌と状とをとるべきである（ピリピ書二・六―八）。政治に文化に、醫療に教育に、農耕に組合運動に、一切の國家的組織と運動の中に基督者は勇敢に進み入らねばならない。失敗をおそれる要はない。飢餓線上を彷徨しつつある一般民衆の苦悶をよそに、教會だけが小さい安んを愉しむやうなことがあつてはならない。けれども、けれどもである。これらの配慮の上に立つて更に、我々は所謂宣傳の制限を覚えざるを得ないのである。宣教師は、文字通り、傳令に過ぎない。極言すればチンドン屋でよろしい。けれども、神の言の傳令なのである。我々に依託された宣教師は、福音の對人格的・人格内的展開以外のものではない。神實在に對する孤獨の格闘と、悔改と、聖なる愛の壓倒の自覺とを、經過し結果しなければならぬ。多くの大衆説教、或はラジオの禮拜實況放送などが、心ある人士をして眉を撃めしめる所以を考へなければならぬ。眞理が眞理らしく、眞實をもつて、語られないからである。聽聞者の態度が神の言をきくのに相應したところまで養成されないからである。

私はここで初代教會の傳道方法を想ひ起したい。ハルナックは、初代教會の傳道にまづ成果をあげ

たものは誠實勇敢な信徒一人一人であつた、といふ。その傳道説教は、断片的で急所をつくやうな短い言葉で語られ、常に倫理生活をはげます類のものであつた。ホルに從へば、その頃には所謂傳道説教はなかつたといふ。信徒を中心とする眞剣な禮拜に、異教徒の出席を歓迎はしたけれども、手加減を加へた様子はないらしい。リーツマンによれば、初代信徒の傳道に最大の役割をはたしたものは、消極的には、迫害や不如意に直面して、信者が一致して保つた平和と靜謐と高雅な態度にほかならなかつた。積極的には、彼等の日常生活のただしさであつた。劇場に遊ばず、肉屋に於ける買物に列を亂さず、飲酒せず、約束を破らず、質素に暮し、等々。これは戦争中肝に銘じた傳道法であつたが、これからもまた深く顧慮さるべきことである。政治を思ひ文化國家建設をいふ人々が、本當に眞剣にそれらの分野に戦つてみるならば、或は悟るときが來るかも知れない、個への靜かな愛惜と教へとを措いて、無くて協ふまじきものはなかつたと。

四

第一福音書記者は、第二段すなはち三節を僅少な偏差をもつて引用し、牧者のすがたに對する古典表現をのこしてゐる。「傷ついた葦を折ることなく、燻つてゐる燈火を消さないであらう、正義に利を得させるまでは」(マタイ傳一二・二〇)と。ヨハネは、善き牧羊者の譬をもつて、傳道の骨髄を示し(ヨハネ傳一〇・一一一八)、パウロは隨處に宣教者としての自己辯明をもつて、すべて傳道

團體の生きさまに方向を與へてゐる。その代表的な個所を讀んでみよう。

「弱い者には、弱い者を得る爲に、弱い者となつた、凡ての人に對して、いかにかして幾許かの人を救ふために、私は凡てのものとなつた、福音の爲に、自らも福音に與かる爲に、私は凡てのことをする」(コリント前書九・一二—一三)。

先日私は、宮澤賢治の絶筆ともいふべき詩「雨ニモマケズ」をあらためて讀み、やはり深い感動をうけた。途中から讀んでみる。

「……アラユルコトヲ／ジブンヲカンジヨウニ入レズニ／ヨクミキキシワカリ／ソシテワスレズ／……東ニ病氣ノコドモアレバ／行ツテ看病シテヤリ／西ニツカレタ母アレバ／行ツテソノ稻ノ東ヲ負ヒ／南ニ死ニサウナ人アレバ／行ツテコハガラナクテモイイトイヒ／北ニケンクワヤソシヨウガアレバ／ツマラナイカラヤメロトイヒ／ヒデリノトキハナミダヲナガシ／サムサノナツハオロオロアルキ／ミンナニデクノボウトヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ／サウイフモノニ／ワタシハ、ナリタイ」。

この魂、あの魂、私はそのためにいつまでもおろおろする者でありたい。

本文にかへる。傷める葦も消えんとする燈火も、ともに人間存在の虚弱性の表徴であらう。葦蘆の群生してゐる沼澤に、病雁一羽落ちて、忽ち折蘆の片々たるを見る。油が盡きて、將に消えかかつて

ゐる燈火は、ときに大きく閃閃するけれども、嬰兒の一息に吹き熄される。この「弱さ」は私共に何を暗示するのであらうか。不信仰の中に信仰の斷片を、死の底に翻轉する點のかさなりを、隣人の中に基督を、見せしめるのではあるまいか。信仰の瞬間を、忍耐といふ幅に映す機縁になるのではあるまいか。一舉にいへば、罪のみ、死のみである。しかし神の義は人を義とする義であり、神の忍耐は智慧の對概念である。信仰者が困難の中で苦悶するときそのゆらぎに見られる魂の質量と、死に瀕するといふときの一種の空間性が、顧慮されてはいけないであらうか。絶望の中の希望無價值の中の價値とは、もと神の愛がそれ自身の理由から掌となつて葦を蔽ひ、杖となつて之を支へたところから、逆に映つた希望であり、價値なのである。傳道者の手は、ただ神の愛の抗し難い強さと範型とによつて自ら疲憊することなく世界を支へる手でなければならぬ。パンヤンは自己を厭うて寧ろ葦でありたいと祈つたが、煙る燈火は嫌悪すべきものであらう。しかし地上の卑しい一粒にも、天の永遠のかけがおとされることを忘れてはならない。スボルジョンはこの本文を解明しつつ、説教者として許された想像の翼をやや過度に張つて、パンの笛の話をした。葦を束ね合はせたこの樂器をダビデが吹奏したといふ。葦が傷むと不和な音を出す。で樂手はすぐに之を取除いて新しいものと代へねばならない。しかるに基督は、この傷める葦をとつて、修繕し、天の笛に入れる。天上の大交響樂が鳴り出でるとき、ひときは清朗な調べが響く。あの多くの音に混つてきこえるあの美しい音は何か。あれは

傷める葦である。かやうに、あのマゲダラのマリヤの聲は、天の音樂のうち最も微妙で優雅であらう。主よ我を憶えたまへといつた哀れな盜人の聲は、深く沈んだバスで他のいづれよりも沈痛な美しさを奏でるであらう。

この葦こそ私共なのである。この燈火こそ我々なのである。自分では望を失ふけれども基督の眼のとどくところ、天の涯地の極いづこに望なき葦があらう。ゆられ、折られ、再び立つすべもないかに見える民族も、主は決して棄て給はない。傳道者とは、この希望の圏内に萬國の民を招くべき傳令にほかならないのである。

この日頃、私共が親しく教をうけた二人の恩師を想ひ起こすことしきりである。お一人は安井哲先生であり、お一人は高倉徳太郎先生である。安井先生の教育者としての特質は、誰がみても、傷める葦を折らない細やかさと勁さにあつた。これが際だつたのが、東京女子大學に於ける所謂赤の事件のときである。その時の、各個の魂に對する懇切を極めた御配慮は、當の人々の心に刻まれてゐるにとどまらず、恐らく日本教育史上に不朽である。高倉先生の御生涯は、勁烈身を隕つて節を全うす、といふべき簡樸の預言者のそれであつた。けれども、全くの裸身をもつて、大いなる眞理とつくみ、自ら傷つき疲れつつ、個々の魂に祈と同情とをあつめようと祈りつとめられた。殊に晩年、よるめきつつ喘ぎつつの激戦の跡は、懐愴みるに堪へぬものがある。がここに先生に於ける「眞實」があつた。

眞理が彼を撃ち、窮途に逐うたのである。そして、そこでこそ、自ら折蘆たるものが、他の折蘆を支へようとして悪戦苦闘の靈魂配慮を實踐したのであつた。この巨きな破れた葦は、その蔭に生ひ育つた小さい平凡な弟子達に、何はなくとも「眞實をもて眞理を示す」曠野の道を獨往するの希望を遺されたのである。先生を偲んで私は、あのいと小さき者の一人の亡びぬ爲にイエスの遺し給うた言を、慰め深くきくのである。「汝ら愼みてこの小さき者の一人をも侮るな。我なんぢらに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり」(マタイ傳一八・一〇)。

五

かれは衰へず喪膽せずして道を地にたてをばらん、もろもろの鳥はその法言をまぢのぞむべし。

此の詩に三度繰返されるミニニパート眞理の語は、諸國諸民族に向けられてゐる。教會内・民族内に、顔をむけた自己閉鎖的・自己完結的なものではない。眞に同胞の苦難に與つて、眞理が慰め深く主張されるとき、自づから萬邦への律法提示となるのであらう。そしてマタイの解する、神の義が「審判が勝利を得る」といふことが、このイザヤ預言の完成であらう。その爲には、ただに自づとといふのみでなく、自覺的に主基督の御顔の向く方へ私共も首をむけねばならない。自覺的に傳道の門戸を開いて、遙か黨國の涯をみなければなるまい。恐らく萬國の民は、自らは自覺することなしに、新しい教を待望するであらう。ことはただに將來に屬するのみならず既定の事實としても語られる。「喪

膽せず」。三節の「眞實をもて」も堅忍不拔を意味する。福音が世界を貫通するまで、主の僕らの傳道は疲倦を知らざるもの如くでなければなるまい。

日本は何をもつて世界に對ひ、何をもつて人類に奉仕せんとするのであるか。多くの分野が開かれてゐると信ずる。しかし、日本こそ、己が罪と萬國の罪との故に、「鬚をむしられる」境涯を経過することによつて、折蘆の痛みと和解の喜びとを身を以て示しうるであらう。イスラエルが國家喪失の淵から第二イザヤを生み、新約の人々を生んで、世界史的使命をはたしたやうに、この愛する日本の傷痕の奥から、萬邦に頌つべき眞の平和眞の希望が溢れ出でて盡きぬであらう。何となれば、惱みの人イエスが傷める我らを貫いて、昨日も今日もそしていつまでも先立ち行き給ふゆゑに。

(一九四五・一〇・於井草聖書研究會禮拜)

(著者——小塩塾々長)



叢書 第13 訂5
同業會編
實菊
新 (近藤泰夫)

眞理が彼を撃ち、窮途に逐うたのである。そして、そこでこそ、自ら折蘆たるものが、他の折蘆を支へようとして悪戦苦闘の靈魂配慮を實踐したのであつた。この巨きな破れた葦は、その蔭に生ひ育つた小さい平凡な弟子達に、何はなくとも「眞實をもて眞理を示す」曠野の道を獨往するの希望を遺されたのである。先生を偲んで私は、あのいと小さき者の一人の亡びぬ爲にイエスの遺し給うた言を、慰め深くきくのである。「汝ら慎みてこの小さき者の一人をも侮るな。我なんぢらに告ぐ、彼らの御使たちは天にありて、天にいます我が父の御顔を常に見るなり」(マタイ傳一八・一〇)。

五

かれは衰へず衰膽せずして道を地にたてをばらん、もろもろの島はその法言をまぢのぞむべし。

此の詩に三度繰返されるミシニパート眞理の語は、諸國諸民族に向けられてゐる。教會内・民族内に、顔をむけた自己閉鎖的・自己完結的なものではない。眞に同胞の苦難に與つて、眞理が慰め深く主張されるとき、自づから萬邦への律法提示となるのであらう。そしてマタイの解する、神の義が「審判が勝利を得る」といふことが、このイザヤ預言の完成であらう。その爲には、ただに自づとといふのみでなく、自覺的に主基督の御顔の向く方へ私共も首をむけねばならない。自覺的に傳道の門戸を開いて、遙か萬國の涯をみなければならぬ。恐らく萬國の民は、自らは自覺することなしに、新しい教を待望するであらう。ことはただに將來に屬するのみならず既定の事實としても語られる。「喪

膽せず」。三節の「眞實をもて」も堅忍不拔を意味する。福音が世界を貫通するまで、主の僕らの傳道は疲倦を知りたるもの如くされねばならぬ。

製本控 信第 號

973 函 347 號 年 月 日

書名 傷ゆる葦を折る(ひとなく)

著者 小塩カ

受入 天正2年 10月 8日

備考

か。多くの分野が開かれむしられる」境涯を経過すイスラエルが國家喪失のうに、この愛する日本のう。何となれば、憐みの給ふゆゑに。

井草聖書研究會禮拜)
(著者——小塩熟々長)



773
347

現代說教選

- 一、山谷省吾——新日本建設の原理
- 二、寺田博——意滿奴惠流阿孟
- 三、柏井光藏——アコルの谷を望の門となす
- 四、赤岩榮——星は導く
- 五、福田正俊——新 生
- 六、原 良三——愛の體制
- 七、小 塩 力——傷める葦を折ることなく
- 八、淺野順一——然りと否
- 九、村田四郎——眞理と自由
- 一〇、清水義樹——キリスト稱念
- 一一、松木治三郎——永遠なる言
- 一二、麻生信吾——ベテスマ
- 一三、渡邊善太——祖國の罪を負ふ者

現代說教選
毎月二冊發行

定價	壹部	五拾
	壹年	貳拾
		貳拾貳圓
<small>壹年豫約希望の方は發行所へ直接申込み下さい</small>		

昭和十一年四月廿日印刷
昭和十一年四月廿五日發行 四〇〇部
傷める葦を折ることなく

著者 小 塩 力

發行所 東京都麴町區飯田町二ノ七

印刷者 長 崎 次 郎

印刷所 田 中 末 吉

東京都世田谷區祖師谷二ノ一三二六

印刷所 大和印刷株式會社

東京一七七

發行所 株式會社 新教出版社

振替東京九九九一番
會員番號A一一九〇二二

配給元 日本出版配給統制株式會社

終

